

大阪府人権擁護委員連合会長賞

一人だけの個性

大東市立谷川中学校 一年 井上 いのうえ 楓菜 ふうな

みなさんは、「障がい者」と聞いて、どのような人を思い浮かべますか。私はみなさんにかたよった見方だけで、「障がい者はこうだ」と考えてほしくない。私たちはこれから社会に出て、様々な人に出会う。その中に、「障がい者」の人達もふくまれているだろう。その人達に出会った時、にげるのではなく、話してほしい。そして、まだ社会に残っているかたよった見方をこわしてほしいと私は思う。

みなさんは、障がいと聞くと、不自由なものを想像してしまいがちだ。でも、障がいにも様々なものがある。例えば、手や足が不自由な人、目が見えない人、耳が聞こえない人、私のように右手の指が三本しかない人など、たくさんある。しかし、それを、かわいそうとか、引くような目で見ないでほしい。それで、きずつく人もいるということを忘れないでほしい。

私は生まれつき裂手症。右手の指は、三本しかなく、手のひらがなかった。これは私が大きくなってから聞いた話だが、私は生まれてすぐ、病院で両手に手袋をはめられていた。それは、母が見られたくないと思い、私の手にはめたそうだ。しかし、父の思いは違い、「太陽の下で正々堂々と生きてほしい」と母に手袋をはずす提案をした。母は父の思いを受け入れ、数日後、私の手袋ははずされた。母の考えは一般的でふつうのことだと思う。でも父は、障がいだからなんだと、すぐく堂々としていた。これは、私の両親の大きな決断で、それからは私の手を周りに一切かくさず、両親はずっと堂々としている。そんな両親に育てられたからか、私も両親と同じ考えをもってしている。三本指だからなんだ。これが私なんだと。手のひらは三歳の頃手術でつくった

し、生活になんの支障もない。シャーペンやしを持つ手も右手だ。だからといって、右手のことで、いじめたりするのは、許さないし、みなさんには、簡単に「障がい」と口にしてほしくない。

ただ、私も小さい頃、なぜ私だけが三本指なのか、と疑問に思ったことがある。そんな時、両親は「それはあなたの個性だから。」と言ってくれた。「あなたの手はまほうの手だから。」私は今でも覚えている。両親が私の疑問をすぐに「答え」にかえてくれたから。それから私は「個性」と考えるようになった。障がいではなく、すべて「個性」なんだと。

私はこの13年間、一度も手のことでいじめられたことがない。それは私の周りのみんなが、私の「個性」を理解してくれたから。

これから社会に出ていく私達。健常者、障がい者、様々な個性に満ちあふれている世界で、私は、みなさんに「障がい者」の差別を絶対にしてほしくない。それをしてもいいのか、してはいけないのか、言ってもいいのか、言ってはいけないのか、しっかり考えて、過ごしてほしい。一つ一つの事で誰かがきずつく前に考えてほしい。

私は、社会に、みなさんに、伝えておきたい。「障がい」ではなく、すべて「個性」だということを。みなさんは「障がい者」と聞いて、どのような人を思いうかべますか。それは、様々な人と出会ってだんだんと、変わっていくでしょう。